

昔、男と女がいて、男の子を二人儲けた。何年か経ち、母親が亡くなった。子供たちは父親と共に残されたが、父親も病気になった。彼は何匹からの山羊と牛、それに銀貨3枚を持っていた。彼は亡くなる前に子供たちに、財産を公平に分けるように言った。上の子は山羊と牛をもらい、下の子は銀貨をもらった。彼は考えた挙句、学ぶために出発することを決めた。

彼は長い間歩き続け、ひとりの老人に出会った。彼は老人に、自分の生い立ちを話してから言った。

「僕は学びたいのですが、銀貨3枚しか持っていません」。

老人は答えた。

「教訓をひとつ教えてあげられるが、それには1枚必要だ」。

男の子が老人に与えると、老人は言った。

「決して聞くことを恐れてはいけぬ。行動することを恐れなければならない」。

彼は老人に礼を述べ、旅を続けた。彼は別の老人に出会い、前と同じことを話した。彼が銀貨1枚を老人に与えると、老人は言った。

「お前のものではないものを決して取ってはいけぬ」。

彼は付け加えた。

「道を進むとマドラサがある。お前はそこに身を置き、学びなさい。その先生に、私がお前を遣わしたと言いなさい」。

彼は[マドラサの先生に]最後の銀貨を渡すと、教えられた2つの教訓を繰り返した。そして先生は彼に最後の教訓を与えた。

「問われていないことを決して話してはいけぬ」。

彼は先生の家で生活することになり、様々な仕事を手伝った。

或る日、男の子と先生は畑に行き、先生の妻が家に残った。道の途中で先生は、噛みたばこを忘れたことに気づき、生徒に、自分の部屋に探しに行くよう頼んだ。先生は生徒を信頼していた。家に着いて、彼は部屋のドアが内側から閉まっているのを見た。彼はドアに穴を開け、先生の妻が他の男と一緒にベッドにいるのを見つけた。彼は驚いて、噛みたばこを取り、何も言わずに去った。先生は、どうして時間がかかったかを尋ね、彼はころんだからだと答えた。彼は本当のことを言うべきだったが、最初の教訓《尋ねられていないことを決して話してはいけぬ》を思い出したからだった。そして彼はこの秘密を心の底にしまっておいた。

また或る日、先生の妻が、これから出かけて午後にならないと戻らないと告げた。そして先生も答えた。

「我々も畑から戻るのは午後になる」。

畑に向かう途中で先生は短剣を置いてきたことに気づき、生徒に家から持ってくるよう命じた。生徒は、ドアが閉まっているのを見て、ノブを壊すと、先生の妻が同じ男といるのを見つけた。彼は短剣を取って立ち去った。妻は泣く振りをして畑に行き、生徒が自分と寝たがったと非難した。先生は怒って、その生徒を殴りつけて言った。

「お前を信用していたのに」。

生徒は話そうと思ったが、《問われていないことを決して話してはいけない》という教訓を思い出して黙った。

先生はその生徒のことを恨み、自分の短剣を断崖の端に置いて、彼が落とされてしまうように罫をかけた。先生はもう一度、生徒に[同じ]用事を言いつけ、生徒は急いでそれを探しに行った。近くに住んでいた老婆が彼に声をかけた。

「来なさい」。

「行けません。急いでいるので」。

「来なさいと言っているんだよ」。

彼が老婆の家に入ると、老婆に彼にとっても熱いスープを勧めた。

「飲めませんよ。急いでいるので」。

「時間が経ってから飲めばいい」。

彼は最初の教訓を思い出した《決して聞くことを恐れてはいけない。行動することを恐れなければならない》。

先生は、生徒が帰ってくるのが見えないので、もうひとりの弟子に短剣を探しに遣った。それから「あの子はもう死んでいるはずだ」と思った。生徒はスープを飲んでから先生の家に戻っていた。先生は驚いて言った。

「お前は生きていたのか？ お前を殺すように手配していたのに」。

「先生は僕を殺そうとしたのですか？」。

「そうだ、お前は私を裏切った、私の妻と寝ようとしたのだ」。

生徒は、3つの教訓の話をしてから、先生に彼の妻についての真実を語った。先生は、それを認め、生徒に祝福を与えた。